

2020年春、新型コロナウイルスの蔓延により、これまで当たり前だと思っていたごく普通の生活はいとも簡単に変わってしまった…。

わたしには小学1年生の一人息子がいる。本来ならば、沢山の人があたたかく見守られる入学式も、マスクをつけてのランドセル、会場は校庭で、ソーシャルディスタンスを保ちながらの等間隔の椅子、親は外からその様子を遠目で覗きこみ、もちろん集合写真もなく、すぐに退散なので、お友達とも、先生とも話すことはなかった。

そして、とうとう次の日から、学校へ行くことはできなくなってしまった。長いステイホームのはじまり。親も子もステイホーム。

さて、なにしよう？ どうやって過ごそう…、

小さな子どもにとって、外に好きなように出られなかったり、友達と遊んだり、走り回ることができないのは、とてもつらいことだ。もちろん、親にとっても、一気に生活スタイルが変わるので、精神的にも体力的にもダメージは大きい。

さて、どうしよう？

でも、この状況を打破しなければいけない、でも、遠出はできない、人が密集しているところにはいけない、ならばと、考えたのが、早朝の海だった…。

海まで自転車で息子と毎日のように出かけた。

何事もなかったかのような青空や風、そして、海はいつものようにわたしたちを迎えてくれるけど、人があまり来なくなってしまった砂浜には、以前にも増して、どこからか漂流してきたゴミが沢山みられるように感じた。お菓子のパッケージ、ペットボトル、網、釣具、くつ、流木、缶、それはそれは見事なまでに、散乱していて、見るに耐えない光景だった。

近年、特に海洋プラスチックごみの問題が世界で注目されている。生態系にも影響が出ると言われているこの問題は、国連の目標及びSDGsターゲットとして「2025年までに、海洋ごみや富栄養化を含む、特に陸上活動による汚染など、あらゆる種類の海洋汚染を防止し、大幅に削減する。」とされている。

わたしは息子にその説明をしながら、一つ一つゴミを持ってきた袋に2人で入れた。息子は理解を示し、積極的にごみを拾う。

かれこれ数日、悶々と作業をしていると、遠くの方で「宝石をみつけた〜！」との息子の声があった。

急いで息子の方へ走って行くと、それは「シーグラス」と言われるキレイなキレイなガラス片だった。

わたしたちはゴミを拾いながら、「シーグラス」を探す遊びをはじめた。

そして、「シーグラス」を使って、サークルをつくった。

ソーシャルディスタンスをたもつための2mのサークル。それがわたしたちの「幸せの空間をつくるガラス」。

これはわたしたち親子がコロナ禍で実際に経験した「幸せの空間をつくるガラス」の物語だ。

